

第一六話 初めて星を見たころ（二）

倉敷天文台を本拠地として活躍した本田実氏は二〇一三年二月が生誕百年の記念すべき年でした。地元では記念行事が行われたようです。同時に発行された「星尋」という本にも本田さんの追悼の文を書きました。山での本田さんの観測所は「星尋荘」でした。

一九九〇年に有名な『本田・ムルコス・パジユサコバ彗星』が回帰した時、本田さんから、「芸西で観測に成功したら、是非写真を送って下さい」と依頼されましたが、悲しいかな本田さんは帰って来たご自分の彗星に誘われるように、天国に行ってしまったのです。倉敷市で行われたご葬儀の日、私はお約束の彗星の写真を胸のポケットに入れて参列いたしました。

今年（二〇一三年）の四月三〇日に倉敷天文台を訪ねましたが、関係者は居ず、庭の片隅に木造の建築物が出来つつありました。歴史ある天文台の記念館でも出来るのでしょうか。一九五四年に初めてここを訪れて覗いたカルヴァー鏡や泊

まった宿直室もそのままあるようでした。

思いは遠く一九四八年に遡ります。高校生の時、はじめて『ホンダ彗星』発見のニュースを新聞で見ました。何でも二月の上旬、朝方のうみへび座に八等級の新彗星を発見したというものでしたが、その少し前に、やはり明け方の空に『マックガン彗星』という肉眼彗星が出現したこともあって、天文に対する興味が次第に増し始めていたのです。小さな手作りの望遠鏡で彗星に挑戦したのですが、そこは素人のこと故、成果は全く挙がりませんでした。

思えば終戦後の、日本がまだGHQの支配下にあって、日本人のうだつが上がらない時代に、次々に新彗星を発見して、国民を勇気づけた本田さんの姿に憧れたもので、この道こそ私の一生を貫く理想だと思ったのです。